

序章——史学科をめぐるヒストリオグラフィー

— 本書の狙い

史学科とはなにか。

歴史学というディシプリンを教育かつ研究する大学の組織というのが一般的な理解だろうか。場合によつては歴史学科や歴史文化学科という呼称をもつこともある。現在日本には、少なからぬ数の史学科がある。もつとも、イギリスのオックスブリッジやアメリカ東海岸のアイビーリーグをはじめとして、欧米では多数ある歴史学部という独立した学部は、今のところ日本では佛教大学ただ一つに限られている。その他の大学は、文学部や人文学部といった戦前以来の学部を構成する一部局として史学科を抱えている。

史学科は、おおよそ、日本史・東洋史・西洋史を基本構成要素とする。これは、明治以来の歴史学の展開を受けとめた結果としての日本の大学の特徴といつてよい。⁽¹⁾立教大学のように、東洋史と西洋史を合わせて世界史とするところもあれば、国士館大学のように制度としての西洋史を設置していないところもある、明治期以来の日東西という三つの基本構成要素だけではなく、美術史学、考古学、地理学、

民俗学、文化人類学など隣接諸学問を含んでいるところもある。九州大学のイスラム文明史学のようにイスラム史に特化したコースもあるし、同志社大学の文化史学科のように文化史という枠でまとまっているところもある。

一方、このような史学科のみが、歴史学というディシプリンを教育かつ研究する場ではない。法学部には法制史・政治思想史・外交史などが、経済学部には経済史・経済思想史・経営史などが、理学部などには科学史が、教育学部には教育史が、農学部には農業史が、工学部には建築史などが設置されている⁽²⁾。また、学科の性質上、文化財学科や観光学科などにも学科名に応じた歴史学のポジションが設置されることもある。それらは、時として法学や経済学といったディシプリンが求めるニュアンスの差は生じるとはいえ、紛れもない歴史学であるし、それを担いうる教員は往々にして歴史家としての訓練を受けている。こうした史学科以外の学部や学科においても、対象とする時代・地域・トピックがいかに異なっていたとしても、問題設定に従って史料を検討し、当該分野の研究史を前進させて通説と通史の書き換えを図る、という作業を共有しているはずである。出版社が歴史講座を編んだとすれば、そこに寄稿する研究者の出身は文学部史学科のみにとどまるものではないし、中学校や高等学校で用いられる歴史教科書は、前述したさまざまな歴史の総合的記述となっていることは明らかである。

このように歴史学を研究教育する場合は様々なところにあるとして、文学部史学科のもつ特徴とは何であろうか。もし文学部史学科に何か独特のカルチャーがあつたとして、それを裏づける要素は何かと考えると、独立した学科であるという大学の組織編成の問題だけではなく、史学科というまとまりを支える公式・非公式の仕組みがあることに気づく。おおよそこの史学科においても、おそらくは(教員免許の認定の問題とかかわって)帝国大学のカリキュラムをモデルとした史学概論、日本史・東洋史・西洋

史概論、史料購読、外書購読、特殊講義、そして教員の専門に沿ったゼミナールが用意されている。こうした大学内組織のみならず、各大学の史学科は、大学単位の学会をもち、その学会は毎年決まった時期に大会を開催し、その学会が発行主体となる会誌や紀要を刊行している。本論集所収の諸論考でも明らかにされるように、史学科のカルチャーを支えるこうした基本的な構成要素は、ドイツの大学制度に影響を受けてルートヴィヒ・リース (Ludwig Riess, 1861-1928)⁽³⁾ が用意し、日本最初の史学科が開設された東京帝国大学において、すでに存在していた⁽⁴⁾。そのみならず、各大学の史学科においても同様の諸要素が共有されていたことを考えるならば、こうした諸要素こそが明治以来の史学科のカルチャーの基礎を成しているようにもみえる。

しかし、基本的な構成要素をもちながらも、史学科は多様に展開した。明治国家における大学制度としての史学科の原型が帝国大学のそれにあるとしても、後続の帝国大学、高等師範学校、私立大学といった器としての高等教育機関、留学や調査を通じ、漢学・国学・洋学の蓄積を巧みに組み合わせて独自のテーマ設定を行い新しい分野を開拓した個性的なスタッフ、神道・仏教・キリスト教などの宗教による規定性、時代とともに進展する植民地空間とその統治システムの拡大、国家主導の教育政策などに対応して、多様なかたちで広がり、各大学の史学科の特色が生まれた。外在的にも内在的にも学問そのものに大きな影響を与える明治国家が生成する近代日本において、御雇外国人や官費留学制度、寄付や文庫購入を通じた洋書の収集、世界でも類例のない多彩な翻訳を通じた西洋学知の蓄積などに裏づけられたグローバルな知の交流は、着実に各史学科の多様性を育み、時として知識のあり方に激越な化学変化をもたらした。歴史家や近代歴史学がグローバルな世界の中で鍛え上げられたとするならば、史学科にもまた同じことがいえるのではないだろうか⁽⁴⁾。

本書は、修史事業の開始した一八六九年から一九四五年に至るまでの、近代日本における史学科（歴史研究機関を含む）の歴史をたどり、比較史的アプローチにより、近代社会における史学科の展開と特徴を明らかにすることを目的とする。

二 研究蓄積…大学史・伝記研究・歴史学の歴史

これまで史学科を対象とした研究が皆無であったわけではない。むしろ、それに関わる情報は一定程度蓄積されてきたといつてもよい。ここでは三つの観点から、従来の史学科に関する研究を整理していきたい。

第一に、大学史の一環としての史学科研究である⁵⁾。先ほど述べたように、史学科のほとんどは文学部に属している。そのため、史学科に関する研究は、大学史の一部局である文学部の歴史の一部として扱われてきた。例えば、大学史の白眉である『東京大学百年史』⁶⁾では、部局史として文学部を切り出し、その一部として歴史文化系統の各研究室の歴史が記述されている。ここでは制度的沿革が正確に跡づけられ、文学部として東京大学の中における史学科の位置を歴史的に確認することができる。これと同様に、各大学の年史研究では、部局として史学科が取り上げられており、本書の各論考の多くでも出発点としての基礎研究として利用されていることが確認されるだろう。部局史は、年史編纂に合わせて学内に時限的に編纂委員会が設けられたり、大学資料編纂センターのような恒久的組織が主体的に編集作業に当たることが多い。そしてそれらの編纂を司り、実際に執筆を担当するのは、その時々⁷⁾に当該大学に所属している歴史家が多い⁷⁾。それは歴史書としての大学史の質を担保することをも意味する。このよう

な大学史の一部としての史学科研究のメリットは、当該大学における歴史全体の中で史学科が位置づけられていることである。たとえば東京大学の文学部長として総長を務めた西洋史家の林健太郎（一九一三—二〇〇四）のキャリアパスをみる場合、史学科だけを見ていてはその意義がわからないだろうし、また、とりわけ現在の感覚をそのまま過去に投影したとすれば、戦前の大学の部局構成や構成人数の醸し出す空気を見誤ることになる⁸⁾。

第二に、伝記研究の史学科研究への貢献である。周知のように、歴史家個人に対する研究は、現在に至るまで一定程度蓄積されてきた。とりわけ史学史や伝記研究の一環として歴史家が取り上げられることは、さほど珍しいことではない。そうした歴史家の伝記研究において、当該人物の活動舞台として史学科が詳述されることは少なくない。たとえば、いわゆる皇国史観の代表的歴史家として知られる平泉澄（一八九五—一九八四）は、戦前における東京帝国大学国史学科の歴史と不可分の存在として常に描写されているし、総合的な文化史を構想した西田直二郎（一八八六—一九六四）も同様に戦前の京都帝国大学国史学科の中でのキャリアとともに描き出されるだろう⁹⁾。ただし史学科の存在は歴史家にとって所与の前提であるだけでなく、歴史家自身が史学科をデザインしてゆく場合もあった。本書で検討する慶應義塾の田中萃一郎（一八七三—一九三三）や立教大学の小林秀雄（一八七六—一九五五）のように、各大学の草創期の歴史家もまた、史学科の特徴を構想し規定した人物として取り上げられることが多い¹⁰⁾。

第三に、歴史学の歴史としての史学科研究である。既に見たように、『20世紀日本の歴史学』や『西洋史学の先駆者たち』のように、日本における歴史学の展開を整理したヒストリオグラフィーは刊行されている¹¹⁾。これらの記述のあちこちには、人物や研究成果とともに、いくつかの大学史学科の位置づけもなされている。また大学ごとの学問史を整理した『東京帝国大学学術大観』や『二橋大学学問史』

では、歴史学を含めた当該大学での学問展開を整理しながら、近代日本の学問の歩みを記録している⁽¹²⁾。制度としての歴史学という観点から基礎研究を積み重ねたのは大久保利謙（一九〇〇—一九九五）である。彼は、帝国大学や帝国学士院の歴史編纂を通じて学問を支える組織の歴史に深い関心を寄せ、重要な研究を残した⁽¹³⁾。他方で京都帝国大学の東洋史の位置も特筆すべきであろう。内藤湖南（一八六六—一九三四）、狩野直喜（一八六八—一九四七）、桑原隲藏（一八七二—一九三二）らが創始した京都の東洋学は、史学科や人文科学研究所で生み出される成果と人脈において、日本の歴史研究の中でも特別な磁場であり続けた⁽¹⁴⁾。学統や学閥という点では最も顕著であり、なおかつ成果も膨大だからであろう。但し、こうした史学史叙述からは、東西帝国大学以外の多くの大学の史学科が独自色をもちながら近代歴史学を支えてきた事実が見落とされがちになる。

いずれの観点であるにせよ、現在までに一定の成果を得られているし、今後も、大学、歴史家、史学史それぞれの研究の展開の中で新事実が発見され新しい研究視角もたらされるだろう。それらは本書の各論にとって、基礎的なデータを提供してくれることは間違いない。

三 新しい視点…集団人物誌・制度史・比較史

既に見たように、従来の研究アプローチやその成果が明らかにしてきた事実は膨大である。本論集もそうした従来の積み重ねで得られた情報を土台として議論を進めていることは言を俟たない。他方では本論集では、従来の研究とは異なる視点の導入を試みている。

第一に、集団人物誌である。すでに指摘したように、史学科に所属する歴史家の伝記的研究は一定程

度の蓄積を見ている。近代日本史を代表する人物として、吉川弘文館やミネルヴァ書房の伝記叢書に収められているものもいるし、各大学の史学科で開祖であるとか中興の祖であるとか時代の画期として光が当てられる人物もいる⁽¹⁵⁾。しかしそこで取り上げられる彼らは、いつてみればそれぞれの史学科にとつてのヒーローである。本書では、そうしたヒーローにも光を当てるとともに、各大学の史学科のスタッフ全体に目配りする集団人物誌的アプローチを垣間見ることが出来る。歴史研究においてプロソポグラフィと呼ばれる手法であるが、個性ある史学科に所属したスタッフ全体を視野に入れ、それぞれの史学科の特徴を指摘する⁽¹⁶⁾。教員だけではなく、史学科の卒業生たちがどのようなバックグラウンドをもち、どのように学び、どのような職業に就いたのか、逆にいえば、史学科で学んだ人材にはどのような社会的な役割が期待されていたのか⁽¹⁷⁾。教育学や教育史の蓄積と手法にも依拠しながら、史学科のスタッフ・学生・卒業生から構成される人間集団を分析し、彼らの抛り所として独自の知を生み出してきた史学科という組織の特徴を別決することを試みる⁽¹⁸⁾。

第二に、制度としての史学科へのアプローチである。史学科は、文部省（文部科学省）が定めた大学設置基準に従って、卒業に必要な科目を設置している一つの組織である。そのように考えた場合、史学科という制度は、学術行政や大学行政における学問編成と不可分である。寺崎昌男は近代日本の大学史について「近代公教育制度の成立と不可分の関係の中で組織され発展してきたのが日本の大学であり、既存のギルド的集団に近代法がかぶさるのではなく、制度や法が学者集団を生み出し、その集団が制度や法を介して政府・社会と対峙する、という循環をたどった」と総括している⁽¹⁹⁾。この指摘に倣うとすれば、史学科で学んだ者がある種特権的なアカデミズムに基づく歴史家集団を形成することになる。

実のところ、歴史を学び、史料を収集し、歴史を記述する者たちは、大学成立以前から存在していた⁽²⁰⁾

他方で明治以降、多様なあり方で「歴史を書く」という行為を展開する在野の歴史家をアマチュアとして排除し、国家の要請に応じて史料編纂掛や帝国大学により集まる学者を構成要素とすることでアカデミズムとしての歴史学は成立した。⁽²¹⁾しかし実際のところ、近年の史学史研究が明らかにするように、アカデミズムの外部に広がる「歴史を書く」実践は、さまざまなメディアを通じて、近代日本における歴史認識の裾野を広げてきた。逆説的に言えば、そうした制度外の「歴史を書く」という実践の大きさゆえに、史学科の歴史学は自身こそが正統的な歴史記述を生成する歴史研究のだと声高に主張しなければならなかったともいえる。⁽²²⁾

ではこのように考えてみた場合、近代日本社会における史学科は、制度的にどのような共通点を備えていたのだろうか。既に冒頭で史学科カルチャーについて触れたが、それらを醸成し担保する要素であるカリキュラム、学会、機関誌および「研究室」のありようを理解する必要がある。カリキュラムは、学位付与のための必要条件という、優れて設置要件に依存する要素である。従って文部省により、各大学に対して一律の条件を付与しているという点で、全ての史学科を縛る要件とも言える。しかし、当初は帝国大学をモデルにしていたにせよ、中心となる教員の専門、関心、個性により、各史学科のカリキュラムは、徐々に特徴を帯びるようになる。学生も、この専門を学ぶのであればこの大学やあの先生がよい、と選択の幅が生まれてくる。その上で各大学に生まれてくるのが、独自の史学科カルチャーを生み出す学会ならびにその機関誌である。マーケットに左右される民間の集会や定期刊行物と異なり、編集を担当するスタッフと学生、場合によっては資金が史学科という制度的に担保されている、大学を基盤とした学会と機関誌は、制度としての持続可能性を備え、史学科カルチャーを「見える化」する役割を果たした。

さらに踏み込んでいうならば、こうした史学科カルチャーをより深いものとしていた要素として「研究室」に注目をしたい。本論集の佐藤論文などで紹介されるように、理系の実験室・ゼミナールをモデルにして導入された「研究室」は、教官の個人研究室とは異なり、学科に属する複数の教員・学生・卒業生のコミュニティとしての性格をもち⁽²³⁾、戦後の学科再編によって史学科という枠組みがなくなったあとも歴史学というディシプリンに基づく教育・研究の基礎単位として機能し続けた。また、夏目論文によれば、東京商科大学（現・一橋大学）はそもそも史学科といった組織をもたなかったが、「ゼミナール」（ゼミ）の枠組みで歴史教育・研究が行われていた。良きにつけ悪しきにつけ、対面の人的交流を要請する「研究室」は、これを基盤にして組織される学会に有形無形のコネクションやネットワークを用意し、その研究室の卒業生の同窓会組織をも兼ねるようになる。⁽²⁴⁾坂本太郎『古代史への道』に見える東京大学国史研究室、『立教大学史学会小史』が伝える立教史学科、家永三郎『東京教育大学文学部』が再現する東京文理科大学の史学研究室などは、それぞれが培ってきた史学科カルチャーをそこに読み込むことができるだろう。⁽²⁵⁾

第三に、以上の要素を踏まえた上での比較史の試みである。本書は、東京と京都の両帝国大学の史学科やそこが擁するスター研究者を論じるだけではなく、一九四五年以前の近代日本という枠組みの中で史学科全体を捉えようとする試みである。近代世界のグローバルな動きの中で開国と明治維新を遂行した帝国日本という舞台の中で、大学も史学科も多様に展開した。そのように舞台を揃えた上で、相互の人的交流や各大学の固有事情、影響関係・対抗関係にも注目しながら、それぞれの史学科のもつスタッフと制度を比較し、共通点と相違点を確認できるように試みた。従来の大学史や史学史では、無意識のうち東京帝国大学に大きな比重を置いたり、あるいは帝大・官学と私大・民間との対抗軸で論じられ

る傾向があったかもしれない。⁽²⁶⁾本書で多様な歴史を持つ私立大学を取り上げたのは、官学・私学という対抗関係や帝大諸制度の私大への下方分散というモデルを避け、帝国大学以前あるいはその外部の学問伝統や社会的基盤に注目しながら、多元的かつ複眼的な史学史像を描くためである。⁽²⁷⁾

より具体的にいうと、第一に、国学・漢学といった近世以来の学問の系譜に、第二に近年注目されている宗教と学問の関係に、第三に中等教育と高等教育との関係に注目している。第一に関しては國學院、第二に関しては仏教系である龍谷大学とミッション系である立教大学、第三には（官学であるが）広島高等師範学校をとりあげた。そもそも帝国大学設立以前の東京大学は多様な官学・私学の中のワン・オブ・ゼムの存在にすぎなかったが、帝国大学は、「国家ノ須要」に⁽²⁸⁾応じて近代学問を担うオンリー・ワンとして設置されたし、結果としてそうした自己主張を行う存在となった。⁽²⁹⁾だが、そのような東京帝大の自己像を唯一の近代大学像と見做す必要はないし、東京帝大から近代学問が始まったかのような史学史像をもつ必要はない。とはいえ、帝国大学以外の史学科の動きを検討することで、逆に、帝国大学の持つ特徴もより鮮明となるように思われる。東西の帝国大学のみならず、戦前に史学科が設置されていた東北帝国大学と九州帝国大学、そして帝国日本の拡大に合わせて設置された京城帝国大学、台北帝国大学、そして建国大学における史学科の検討は、史学科を通じてみた帝国日本像を浮き彫りにすると同時に、学知のもつ権力性をも明らかにするだろう。⁽²⁹⁾

比較史の視点は、さらに二つの論点を私たちの論集にもちこむ。一つは、海外における史学史研究やインテレクチュアルヒストリーに、豊かな比較素材をもたらすことである。「ネイションを書くこと」(Writing the Nations)という近代ヨーロッパにおける歴史記述の比較史では、制度としての歴史学を比較する巻も刊行されている。⁽³⁰⁾ドイツから近代歴史学の作法を導入した日本の成果は世界にとっても比較事例

として意味を持つだろうし、また、今回検討した日本の史学科を相対化しかつ特徴付けるためにも、グローバルな比較は意味を持つ。第二に、ポジションナリテイの問題である。今回、本論集の執筆者の多くは、自らの出身大学か勤務先の史学科記述を担当している。その結果として、客観的なデータを用いているとはいえ、その記述にはながしかの個人的感情や立場が反映されているかもしれない。それがよい悪いという道徳的価値観の問題ではなく、ナカの人間という自意識や愛憎半ばする距離感、ヒストリオグラフィーを支配する重要な要素の一つである。本書は史学史の研究であるとともに、今後展開されるであろう史学史の材料として批判的に検討されるべきヒストリオグラフィーを集合させた論集でもある。

現代日本の大学において、史学科という組織は大きな転換点を迎えている。というよりも、そうした時代状況もまた、本論集を編集した背景のひとつといつてよい。⁽³¹⁾本書がひとまず一九四五年を区切りとするのは、新制大学の出現や大学紛争という大きなテーマまで一冊の本では扱いきれないという物理的制限のみならず、一九二〇・三〇年代に確立した史学科の枠組みが、戦後の新制大学においても、数的規模や構成員の多様性を伴いつつも、存続してきたと思われるからである。しかし、一九九〇年代以降の大学改革は、史学科のあり方にも大きな変革を求めつつある。それを象徴するのが学部名称の多様化である。⁽³²⁾この現象について寺崎昌男は「専門学ディシプリンがあるから学部・学科が生まれる」という時代から「課題があるから学部・学科が生れる」という時代への大きな移行が起きつつある」という見通しを示している。⁽³³⁾そうであるとするならば、歴史学というディシプリンに従っておおよそ文学部内に設置されていた史学科もまた、新しい時代への対応を迫られるはずである。

しかし既にみたように、史学科は歴史を研究教育する唯一の組織ではない。諸学部学科で多様な○
 ○史が研究・教育されてきたし、アカデミア外でも近世以来の多様な「歴史を書く」が実践されてきた。
 人間社会にとって「歴史」とは、それだけの豊かさと多くの課題をもつものであり、良くも悪くもアカ
 デミズムの独占物にはなり得ない。すでに史学科の役割は自明ではないのである。変貌の真つ只中にある
 史学科が今後も存続するかどうかは、私たちの社会と歴史との関係のありかたにも深く関わってくる
 だろう。

以上のような課題を念頭におきつつ、歴史学という学問の歴史にとって、そして、日本の近代社会に
 おいて、史学科という枠組みのもった意味を解き明かしていきたい。

四 本書の構成

本書では、以上のような視点のもと、十三の大学ならびに附置組織を取り上げる。対象となるのは、
 最初の組織である東京帝国大学並びに史料編纂所、後続する帝国大学（京都帝国大学、東北帝国大学、京城
 帝国大学）、それぞれ設立の目的・理念を異にする官立・私立の大学（東京商科大学、東京専門学校、慶應義塾
 大学、皇典講究所（・國學院大學）、立教大学）である。いずれの大学史学科も、独自の教育課程をもつ史学
 科（もしくはそれに類するコース）、大学独自の学会、その学会の機関誌をそなえ、独特の学風を育みなが
 ら、研究成果、研究者、卒業生らを生産してきた機関である。今回はとりわけ日本史研究に注目し、各
 組織の成立課程、スタッフ、学会、機関誌などを検討要素として切り出し、それぞれの特徴を抽出する
 とともに、近代日本における史学科のもつ役割を明らかにしたい。

以上のような観点を勘案して、本書ではいくつかのカテゴリを代表する大学を選別し、そのカテゴ
 リーを代表する史学科・研究機関を取り上げることにした。帝国大学、植民地の帝国大学（および満洲国
 の建国大学）、官立（師範学校）、私立大学、の四つである。全体の構成は以下のとおり。

第I部 帝国大学

- 第一章 東京帝国大学・佐藤雄基
- 第二章 史料編纂所・近藤成一
- 第三章 京都帝国大学・上島亨
- 第四章 東北帝国大学・柳原敏昭
- 第五章 九州帝国大学・山口輝臣

第II部 植民地・外地の大学

- 第六章 京城帝国大学・台北帝国大学・建国大学・永島広紀

第III部 官立大学

- 第七章 商科大学・東京商科大学（二橋大学）・夏目琢史
- 第八章 旧師範学校・広島文理大学（広島大学）・石田雅春

第IV部 私立大学

- 第九章 早稲田大学・廣木尚
- 第十章 慶應義塾大学・堀和孝
- 第十一章 ミッション系・立教大学・小澤実

第十二章 仏教系・龍谷大学・坂口太郎
 第十三章 国学神道系・皇典講究所・國學院大学・藤田大誠

本書は、二〇一七年三月十日・十一日に立教大学で開催された公開シンポジウム「史学科の比較史・草創期から一九四五年」での報告を出発点としている。ただしその後、対象とする大学の幅を広げ、議論をより俯瞰的かつ包括的にするために、石田雅春と坂口太郎の論考を追加した。

史学史や近代史にとって重要なテーマと認識してくれてのことであろう、寄稿者のほとんどは平日通りに重厚な論考を寄稿してくださった。それから刊行に至るまでここまで時間を要したのは、ひとえに編者のひとり小澤の責任である。昨今の大学を取り巻く変貌とそれに伴う業務量の増加というお定まりの言い訳をするつもりはない。寄稿者の誰もが多くの仕事を抱えながら、研究、教育、学務において大きな成果を挙げ責任を果たしつつあるのを見ていたのだから。辛抱強くお待ちいただいた執筆者各位、年表作成や索引をお手伝いいただいた立教大学の田中勇作さん、本書企画をいち早くお認めくださった勉強社の吉田祐輔さん、編集上の無理なお願いをお聞き届けていただいた同社の皆様に感謝申し上げます。

二〇二二年二月

小澤 実
 佐藤雄基

注

- (1) 明治以来の日本における歴史学の展開については、永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年）を参照。とりわけヨーロッパ史学との関係においては、土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』（中公叢書、二〇一二年）ならびに、柴田三千雄『日本におけるヨーロッパ歴史学の変容』（岩波講座世界歴史30別巻現代歴史学の課題）岩波書店、一九七二年）四四三―四七七頁。
- (2) その理由の一つとして、近代学問が歴史主義の潮流のもとで生まれ、あるいは発展段階論的な歴史観の影響をうけ、のちには経路依存性を重視するところから、そのディシプリンの内部に歴史研究を組み込んできたことをあげておきたい。学部別のディシプリン史については多くの研究があるが、たとえば『法制史研究』七〇集（二〇二〇年）の特集「日本における法史研究の歴史」一二五―二一八頁など。
- (3) リースについてはさしあたり、早島瑛「近代ドイツ大学史におけるルートヴィヒ・リース」、『商学論究』五〇巻一・二号、二〇〇二年）五六五―五九二頁、西川洋一「東京とベルリンにおけるルートヴィヒ・リース」（東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社、二〇〇三年）二〇二―二二三頁。
- (4) 近年のグローバルヒストリー研究の進展のなかでの歴史学研究やヒストリオグラフィーの研究については、Daniel Woolf, *A Concise History of History: Global Historiography from Antiquity to the Present*, Cambridge: Cambridge UP, 2019; Georg G. Iggers, Q Edward Wang, and Supriya Mukherjee, *A Global History of Modern Historiography*, London New York: Routledge, 2017; Daniel Woolf (ed.), *The Oxford History of Historical Writing*, 5 vols. Oxford: Oxford UP, 2015.
- (5) 近代日本の大学史に関して、寺崎昌男『近代日本大学史』（東京大学出版会、二〇二〇年）を参照。また天野郁夫の一連の通史も参照。とりわけ『帝国大学——近代日本のエリート育成装置』（中公新書、二〇一七年）、『高等教育の時代』（上下、中公叢書、二〇一三年）ならびに天野郁夫『大学の誕生』（上下、中公新書、二〇〇九年）。古典として大久保利謙『日本の大学』（玉川大学出版会、二〇〇八年）。基本資料として文部省編『学制百年史』（帝国地方行政学会、一九七二年）。

- (6) 『東京大学百年史』通史編三冊、資料編三冊、部局史四冊の全十冊（東京大学出版会、一九八四—一九八七年）。
- (7) 大学史編纂について、中野実『大学史編纂と大学アーカイヴズ』（野間教育研究所紀要第四五集、野間教育研究所、二〇〇三年）、寺崎昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる——沿革史編纂必携』（東信堂、一九九九年）を参照。
- (8) 林健太郎の自伝として、林健太郎『昭和史と私』（文春学藝ライブラリー、二〇一八年、初発表一九九二年）。
- (9) たとえば、若井敏明『平泉澄』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）。西田直二郎に関して、斉藤利彦らによつて近年数多くの論文が発表されている。
- (10) 京都という地域で歴史学が成長する状況を論じた以下の論集は参考になる。小林丈広編『京都における歴史学の誕生——日本史研究の創造者たち』（ミネルヴァ書房、二〇一四年）。
- (11) ただしほとんどの著作は、日本史・東洋史・西洋史のいずれかに力点をおいた記述となっていることは注意したい。
- (12) 東京帝国大学編『東京帝国大学学術大観』（東京帝国大学、一九四二年）、一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学学問史——一橋大学創立百年記念』（一橋大学、一九八六年）。
- (13) 『大久保利謙歴史著作集』全八巻（吉川弘文館、一九八六—一九九三年）のほか、佐藤雄基編『明治が歴史になったとき——史学史としての大久保利謙』（勉誠出版、二〇二〇年）。
- (14) 礪波護・藤井讓治編『京大東洋学の百年』（京都大学学術出版会、二〇〇二年）や岸本美緒編『帝国——日本の学知3東洋学の磁場』（岩波書店、二〇〇六年）。
- (15) 例えは高田誠二『久米邦武』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）やLisa Yoshikawa, *Making History Matter: Kwotia Kasumi and the Construction of Imperial Japan*, Cambridge, MS; Harvard University Asia Center, 2017を参照。
- (16) 次の研究は、関係者の悉皆調査を通じて制度の傾向を明らかにしているという点で、プロソポグラフィに相当する内容を持っていると言える。寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究——文部省教員検定試験と戦前教育学』（学文社、一九九七年）、石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫、一九九二年）。
- (17) このような試みの一つとして、佐藤雄基「卒業論文題目からみた近代歴史学の歩み——東京帝国大学国史学科一九〇五—一九四四の事例報告」（『立教大学日本学研究所年報』二〇号、二〇二一年）四九—三〇頁。ケール博士の教え子の言説の網羅的検討からケール像を再構成する研究として、松井健人「大正教養主義の起源—東京帝国大学教師ラファエル・フォン・ケールと学生たち—大正教養主義創成期の歴史社会的考察」（『ソシオロギス』四四巻、二〇二〇年）五七—七二頁。
- (18) 歴史学を対象としているわけではないが、竹内洋の一連の研究は参考になる。竹内洋『日本のメロトクラシー——構造と心性 増補版』（東京大学出版会、二〇一六年）、同『学歴貴族の栄光と挫折』（講談社学術文庫、二〇二一年）を参照。
- (19) 寺崎昌男『日本近代大学史』（東京大学出版会、二〇二〇年）i頁。
- (20) 「歴史を書く」ことの多様性については、松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』（山川出版、二〇一五年）。
- (21) アカデミズム史学の成立プロセスと展開については、以下の研究を参照。廣木尚『アカデミズム史学の危機と復権』（思文閣出版、二〇二二年）、山口道弘「三上参次と官学アカデミズム史学の成立」（『法政研究』八六巻四号、二〇二〇年）二八九—三五四頁、マーガレット・メル『歴史と国家——一九世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』（千葉功・松沢裕作訳者代表、東京大学出版会、二〇一七年）、松沢裕作『重野安禪と久米邦武——「正史」を夢見た歴史家』（山川出版社、二〇二二年）、大久保利謙『日本近代史学の成立』（吉川弘文館、一九八八年）などを参照。
- (22) 近代歴史学に対して、独自に歴史を改変する言説については、小澤実編『近代日本の偽史言説——歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』（勉誠出版、二〇一七年）。
- (23) 帝国大学の官制において明確な位置づけを与えられたものではない。東京帝国大学文科大学（文学部）の場合、「研究室」の設置時期が学科によってまちまちである。「分科大学通則」第六副手規定・第一条には「分科大学ノ教室実験場及医院ニ副手ヲ置ク無給トス」とあるように、「教室実験場」に無

休副手をおくことが認められていた。一九一八年の「東京帝国大学付属図書館規則」改正では、本館だけではなく「教室研究室其他ノ部局ニ備付ノ図書」の存在が認められているが、実態としてそれ以前から各「教室研究室」が研究用図書をもっていったようである（東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史四』東京大学出版会、一九八七年、一一九八・一一九九頁）。こうして図書と副手のおかれた研究・教育拠点としての「教室研究室」が、いわゆる「研究室」の制度的な位置づけであると思われるが、その詳細は今後の課題である。

(24) 逆にいえば、日本の大学ごとに国立大学は、近年に至るまで大学単位と同窓会組織が弱かった。旧帝国大学全体の卒業生の同窓会組織として、一八八六年に学士会が設立されていたが、二〇〇四年四月の国立大学法人化の前後の時期に、旧帝大ごとに全学の同窓会組織があいついで設立されている。一方、広島高師では同窓会として尚志会（一九〇八年命名）、東京商業大学では如水会（一九一四年設立）がある。

(25) 坂本太郎『古代史の道——考証史学六十年』（読売新聞社、一九八〇年）、立教大学史学会編『立教大学史学会小史』（立教大学史学会、一九六七年）、家永三郎『東京教育大学文学部——栄光と受難の三十年』（現代史出版会、一九七八年）。

(26) 例えば、東京帝大への対抗組織としての京都帝大記述として、潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（講談社学術文庫、一九九七年）。

(27) 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』（山川出版社、二〇一五年）において示された史学史像を前提にしている。近年、私立大学の研究も盛んになっている。伊藤彰浩『戦時期日本の私立大学——成長と苦難』（名古屋大学出版会、二〇二二年）。

(28) 寺崎昌男『日本近代大学史』六頁。

(29) 帝国日本と学問との関係について、例えば、坂野徹・塚原東吾編『帝国日本の科学思想史』（勁草書房、二〇一八年）、柴田陽一『帝国日本と地政学——アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』（清文堂出版、二〇一六年）、酒井哲哉他編『岩波講座「帝国」日本の学知』（全八巻、岩波書店、二〇〇六年）、坂野徹『帝国日本と人類学——一八八四—一九五二年』（勁草書房、二〇〇五年）を参照。

(30) Ilaria Porciani, and Lutz Raphael (ed.), *Atlas of European Historiography: The Making of a Profession, 1800-2005* London and New York: Palgrave Macmillan, 2010.

(31) 激変する近年の大学の状況を手際良くまとめた吉見俊哉『大学とは何か』（岩波新書、二〇一一年）、同『大学は何処へ』（岩波新書、二〇二二年）を参照。

(32) 戦前以来の文学部のような一文字学部は、一九一八年の大学令において学部名称が「法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学及商学」と規定されていたように（第二条第一項）、帝国大学の学部編成によるものであったが、一九九〇年代以降学部・学科の名称は多様化している。寺崎昌男『日本近代大学史』四八三頁。

(33) 寺崎昌男『日本近代大学史』四八七頁。